

10月に入ってようやく落ち着いて授業に臨める日が戻ってきました。当初の予定から変更になった2学期の中間試験も終わりました。

朝夕は秋の涼しさを感じるものの、まだまだ日中は暑い日が続きます。1か月遅れの体育祭も近づいてきました。日没がずいぶんと早くなり、校舎の影がグラウンドに長く伸びだす放課後、各学年学級が練習に励む姿を見ていると、これが本来の学校の姿なのだとつくづく思います。



体育祭の取組と並行して、合唱の歌声も聞こえてくるようになりました。もちろん、感染症対策も欠かしません。また、それぞれの学年でも地域学習や防災の取組、人権学習など、行事の間を縫って、自分たちを高めるが学習が進められていきます。

全国学力・学習状況調査からみる朝明中生 その1

本年5月27日に中学校3年生（小学校は6年生）を対象に2年ぶりに実施された「全国学力・学習状況調査」の結果が明らかになりました。今回の学力調査では、国語は全国平均を下回り、数学は全国平均を上回るという結果でした。

両教科ともに無回答率が全国平均と比べ非常に低く、意欲の高さを感じます。今回の結果から見える朝明中生の強み弱み、生活の実態についての特徴的なものをこれから紹介していきます。第1回目は国語を検証してみます。

中学校国語

◆ 自分の考えを書く意欲はみられるが、条件がある作文は苦手

調査の結果、国語については、問題を最後まで解こうという意欲があり、自分の考えをもって意見文を書くことができ、漢字を読むことが得意であることがわかりました。反面、文章中の語句を正しく理解できず、読み取りがあいまいになり、条件がある作文を書くことが苦手であることもわかりました。

漢字や言語についての問題以外で高い正答率を示したのは、**2 意見文を書く** の設問一：書いた文章を読み返し、語句や文の使い方、段落相互の関係に注意して書くことができるかどうかをみる問題でした。本設問は、山田さんが書いた【意見文の下書き】を推敲する場面が設定されています。山田さんが、**Ⓐ**及び**Ⓑ**の部分のように文章を直した意図について、最も適切なものを選択する問題です。

ここで、国語が苦手な人もいっしょに考えてみましょう。



① SNS（ソーシャルネットワークワーキングサービス）などを活用し、インターネット上で文字を通したやりとりをする機会が増えてきている。私は、SNSでやりとりをする際は、相手にどう伝わるかをよく考えながら言葉を選んで使うべきだと思う。SNSは少ない文字数で自分の思いや考えを表現することが多く、相手に伝えたいことが正しく伝わらないことがある。^④からだ

② 以前、私は次のような経験をした。SNSを使い、みんなで待ち合わせの相談をしていたときのことである。一人の友達に対して、待ち合わせの場所までの交通手段を尋ねるつもりで「何で来るの?」と書いたところ、「どうして行ってはダメなの?」という返信が来て、はっとさせられたことがあった。友達は、私の言葉を「なぜ来るのか?」という意味で捉えてしまったのだ。そのとき私が、友達に誤解を与えないように^⑤「集合場所までどうやって来るの?」と書いたら、このようなことは起こらなかっただろう。

③ 皆さんの中には、友達同士であれば短い言葉でも十分に意思疎通が図れると考えたり、短い言葉でやりとりができる手軽さこそがSNSのよさだと考えたりする人もいるだろう。しかし、伝えたいことが正しく伝わらなければ、私が経験したように相手に誤解を与え、不快な思いをさせてしまうこともあるのだ。

④ SNSで自分の思いや考えを表現する場合には、内容を相手に正しく伝えるために、言葉を十分に吟味して使うことが大切だ。少なくともあの経験以来、私は、SNSを使ってやりとりをする際には、自分が書いた言葉を必ず読み返してから発信するようにしている。

次の 1～5 の選択肢の中から最も適切なものを選びます。

- 1 ①段落で述べている意見の根拠となる具体例をより詳しく説明しようとした。
- 2 ②段落で述べている意見の根拠であることをより明確にしようとした。
- 3 ③段落で述べている意見の根拠であることをより明確にしようとした。
- 4 直前の文で述べている意見の根拠であることをより明確にしようとした。
- 5 直後の文で述べている意見の根拠となる具体例をより詳しく説明しようとした。

正解は、① 4 ② 1 です。

国語 2-1 の正答率

本校平均	26.6%
四日市市平均	22.6%
三重県平均	23.0%
(全国平均)	24.8%

完答が求められるために、全体の正答率が他の問題より低くなっていますが、それでも、本校では、全国平均をやや上回っています。

授業においては、内容理解だけでなく、文章構成や展開、表現の仕方等に留意し、どのような工夫と効果があるのかを指導することを大切にしています。本設問においても、「Bには、どのような文を入れればよいか」といった問いではなく、「Bの文があることで、どのような効果があるのか」という問い方となっています。このような問い方をすることが、他の教材でも活用できる「生きて働く力」につながります。

◆◆◆ 今後の改善点

本設問のように、文や段落の関係を捉える力を身に付けさせるためには、「書くこと」の領域で指導するだけでは十分ではないため、「書くこと」の学習で学んだことを、今回、領域別で本校が全国平均を下回った「話すこと・聞くこと」「読むこと」の領域においても意識させるような指導をすることが大切です。

例えば、「話すこと・聞くこと」の単元で実際にスピーチをする際にも、発表者が示す具体例が考えを支えるものになっているかを吟味させるなど、「書くこと」の領域以外でも繰り返し学習することで、語句の正しい理解や読み取り、聞き取りのあいまいさを克服できるような授業改善に努めていきます。